

表紙, 目次, 雑纂, 抄録, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38663">http://hdl.handle.net/2297/38663</a>

明治三十六年七月十三日發行

# 十全會雜誌

第二十八號

（非賣品）

全澤醫面學專門學校十全會

# 十全會雜誌第二十八號目次

## ○原 著

○纖維性鼻炎ニ就テ

醫學得業士 川北 辰吉

○日本人ノ脊髓(第一回報告)(承前)

醫學得業士 久保 武

## ○雜 纂

○解屍統計報告

醫學得業士 森岡惣太郎

○阿片中莫兒比混含量ヲ定量スル

藥學三年生 清水 末吉

○實驗瑣談(其三)

南 溪 生

## ○抄 錄

○鼻硬腫性茸腫及鼻硬腫診斷ノ實驗法ニ就テ

パウロウスキ

○早期ニ於ケル乳腺腺毒

マチエナウエル

○淋菌肺炎ノ一例

ブレツセル

○淋疾性ノ皮膚潰瘍ニ就テ

サロモン

○男性小兒ノ淋疾性尿道炎ニ就テ

フヰツシエル

○絶望的大出血ノ場合ニ於ケル止血薬トメノ

「アドレナリン」ノ使用ニ就テ

○甲状腺ノ結核(結核性甲状腺腫)

オ、ラ、ン、ゲ

○膀胱結核及其療法

クレールモン

○微毒性胃腫瘍ノ一新例報告

エル、カスベル  
アインホルン

○微毒ニ基因スル單尿管症

エム、ツアイスル

○治癒シタル微毒性兩側後筋麻痺ノ一例

スタインハウス

(以上十一項、南溪抄)

○弗爾僑刺皮及「カスカラ、サグラダ」皮ノ有効成分ノ定量ニ就テ

シュメリータ

○尿中大黃ノ檢定

プロクシェ

○華攝林中他ノ脂肪ノ檢定ニ就テ

ペオル及ツパン

○古の水と今の水と

霜 坪

○逝く水

す み

○夕雲

同 人

## ○漫 錄

(以上三項、謙中抄)

## ○會 報

○叙任及辭令○會員動靜○身體検査成績○學年試験○書籍寄附○日本醫事雜誌索引

## ○通 信

○松原三郎氏の通信

## ○公 文

○内務省令第三號○内務省令第三號別冊○内務省令第四號○内務省令第五號

## ○會 告

○寄贈及交換書目○會費領収





食道病		口腔及咽頭病		消化器系		肋膜病		肺病		氣管及枝病		喉頭病		鼻病		呼吸器系		血管病		心臟病		心囊病		血液病		循環器系		筋病	
女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
				十名				五	二							十七名									二名				
				四名						四						四名				一	四				五名				
				六名				六	六							十二名				二	二				四名				
				八名				一	〇	〇						二十名				三	二				五名				
				三名				一	四	四						九名					一				一名				
				八名		四	一	四	三							十二名					一				一名				
				五名		一	二	二	二	四	一	一				卅一名				一	一		一		三名				
								五	四	一	四	三	一	一						七	二		一						
				四十四名				九								九十五名				一九	一	一			二十一名				



年	男女別年計		變死		外傷性諸病		全身病	
	女	男	女	男	女	男	女	男
計								
	三八	二八						
	二二	一四			二		一	
	三一	一三			一			
	四五	二二						
	一八	九						
	二八	一四						
	四九	二四			一			
		一〇八					二	
							三	
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三
								一
								二
								三

四、莫兒比涅ノ水及ビ依的兒中殊ニ新タニ沈降セシ場合

ヲ除クモ全ク不溶解ナラザルヲ見バ母液中ニハ尙ホ

安母尼亞酒精等ノ少許ヲ存スルヲ以テ莫兒比涅ノ多

少ヲ溶解スルハ疑ヲ容レザレヒ其量幾何ナルヤハ確

定シ能ハザル

其後ニ至リ實驗ノ結果第四項ニ記セシ莫兒比涅量ヲ確定

シ得ルニ至リシト雖モ尙ホ不完全タルヲ免レス然ルニ吾

人ノ述ベントスル方法ニ據ルヒハ當ニ浸出ノ完全ナルノ

ミナラス他ノ「アルカロイド」ヨリ精密ニ莫兒比涅ヲ分離

シ得ルニヨリ亞爾加里ニ沃度ニテ定量スルモ些少ノ損失

ヲ見ズ既ニ沃度ニ因ル定量法ニ就テハ純莫兒比涅ニテ行

ヒシ實驗ニ依リ其精密ナルヲ知り且ツ四沃度化莫兒比涅

ノ不溶解ナルコトハ己ニ鋭敏ナル「ワグネル」氏試藥ニ因ル

キ亦早クヨリ Jorgensen 氏ノ唱導スル所ナリ先ヅ其方法

ノ大畧ヲ述ベニ

阿片中ニ存スル「アルカロイド」ヲ常溫ニ於テ容易ニ揮散

スベキ安母尼亞性ノ液中ニ於テヨク浸出セシ後液体ヲ氣

散セシメ「ナルコチン」「コデイン」「テバイン」「パバフェリ

ン」及ビ其他ノ「ベンツアル」ニ溶解スベキモノヲ「ベンツ

アル」ニテ溶出シ去ルヒハ獨リ莫兒比涅ハ不溶解性ナル

ニヨリ殘留スベシ故ニ「コロ、ホルムアルコホル」混液

ニテ浸出シ該液ハ常溫ニテ氣散セシメ殘渣ニ二十分一定

規酸液ノ過剩ヲ加ヘ次デ二十分一定規「アルカリ」ニテ

定量スルニアリ亞爾加里液量後莫兒比涅量ヲ對照センガ

爲メ沃度ニテ液量セント欲セバ該液ヲ一定量ニ至ル迄デ

稀釋シ消石灰ヲ混ジ其濾過液ノ一定量ヲ取り酸性トナシ

沃度液ヲ過剩ニ加ヘ此過剩ノ分ヲ定規次亞硫酸那篤留膜

液ニテ再ビ液量シ其消費サレシ沃度量ヨリ莫兒比涅量ヲ

(一分子ノ莫兒比涅ハ四分子ノ沃度ト結合スル比例ヨリ)

算出スルナリ

尙ホ委シク述ブレバ次ノ如シ

三瓦ノ阿片ヲ約百五十 c.c.ノ硝子瓶ニ取り安母尼亞、酒精

各五分嚼囉仿謨十分依的兒二十分ノ混和液ニ乃至三 c.c.ヲ

注加シ小乳棒ニテ攪拌シツ、阿片末ノ覆ハル、迄尙ホ安

母尼亞ヲ注ヤ乳棒ヲ挿入セシマ、瓶口ヲ密栓シ五乃六時間放置シ次ニ十乃至十二瓦ノ食鹽末ヲ投シ絶エズ攪拌シツ、風通ノ善良ナル場所ニ於テ液分ヲ氣散セシメ之レヲ硫酸並ビニ「バラヒン」ヲ誥メシ硝子瓶ヲ有スル乾燥器内ニ移シ放置スルヲ一時間ニシテ小塊ヲ粉末トシ滑カナ紙面ニ採リ硝子「ハーン」ヲ有スル浸出器ノ基底部ニ綿栓ヲ爲セルモノ(之ノ器ヲ製センニハ五十c.c.ノ硝子栓ヲ有スル「ビュレット」ノ上部三分ノ一ヲ截切スベシ)ノ中ニ集メ硝子瓶ハ再三少許ノ食鹽末ヲ以テ研磨シ其附着分ヲ除去シ共ニ浸出器中ニ入レ綿或ハ硝子末ヲ以テ覆ヒ徐々ニ偏蘇兒ニテ浸出シ其十滴ヲ取り蒸發シ酸性ノ水ニ溶解シ二三滴ノ「ワグナル」氏試藥ヲ加フルモ最早混濁ヲ呈セザルニ至リ扁平ナル蒸發皿ヲ受器トシ呵囉仿謨五分無水酒精一分ノ混液ニテ浸出スルヲ上述ノ如ク操作シ「ワグナル」試藥ニ反應ヲ呈セザルニ至ル迄トシ浸出液ハ風通ノ善良ナル場所ニ於テ氣散セシム茲ニ於テ殘渣ニ二十分一定規硫酸液五十c.c.ヲ加ヘテ研和シ細キ「メスチリンドル」

ニ移シ蒸發皿ハ尙復餾水ニテ洗滌シ共ニ「メスチリンドル」中ニ注加シテ全量ヲ九十c.c.トシ二三回強ク振盪セル後靜置シテ不溶解物ヲ沈定セシメ之レガ上清液ノ七十分五c.c.(阿片ノ二、五瓦ニ相當ス)ヲ「ペーケル」ニ取り二十分一定規加里滷液三十乃至三十五c.c.ヲ注キ次ニ亞爾加里ノ過剩ヲ該定規硫酸液ニテ液量シ前ニ消費セラレシ硫酸量ヨリ莫兒比涅量ヲ算出ス之ノ際標示藥トシテ「メチール」ヲレンジ「紙」ヲ用ヒ時々十秒間液中ニ浸シテ其反應ヲ窺フベシ該試驗紙ニ呈スベキ蔷薇紅色ハ甚タ鋭敏ナルヲ以テ例ヒ液ノ黃色ヲ呈スルヲアルモ標示藥ヲ注加スルヲ要セズ斯ノ如クノ二、五瓦ノ阿片ニヨリ消費サレシ硫酸量ニ〇、五八六 $\parallel$ 0.0142 $\times$  $\frac{100}{25}$ ヲ乘ズルキハ其含量ヲ示スモノナリ次テ該液ヲ二百五十c.c.ニ稀釋シ三乃至四瓦ノ消石灰ヲ投シ約一時間時々激シク振盪セシ後其五十c.c.ヲ百c.c.ノ「メスコルベン」ニ濾取シ鹽酸ニテ酸性ト爲シ二十乃至二十五c.c.ノ沃度液(約十分一定規ノモノ)ヲ注ギ振盪セル後放置シテ清澄ナラシメ(尙ホ清澄ナラザルキハ少許

ノ沃度液ヲ注加スベシ即チ上清液ノ赤色清澄トナル迄ト  
 ス)五十c.c.ヲ濾取シ沃度ノ過剩ノ分ヲ澱粉糊ヲ標示藥ト  
 シ一定ノ次亞硫酸那篤留液ニテ液量シ次デ半瓦ノ阿片  
 末ヨリ消費サレシ沃度量ヲ百五十倍(=0.75×100×2)ス  
 ルキハ莫兒比涅量ヲ得ルモノナリ

又單ニ沃度ノミニテ定量セント欲セバ先ヅ阿片ノ壹瓦ヲ  
 取リ上記ノ如ク嚼囉仿謨酒精ノ浸出液ヲ氣散スル点ニ至  
 ルマデ同様ニ操作シ此ノ残渣ヲ一二回善良ナル石灰水ニ  
 テ研和シ百c.c.ノ「メスニルベン」ニ移シ尙ホ石灰水ヲ注キ  
 テ全量ヲ百c.c.トナシ以下前條ノ如ク操作スベシ

左ニ千八百九十年ノ合衆國ノ藥局方ニ記載セラレシ重量  
 法ト既ニ述ベシ方法ニ因ル結果ヲ比較スルニ甚ダシキ差  
 異アルヲ見ルベシ

使用セ ル量	2.5瓦ニ費サレ ル硫酸量	半瓶ニ費サレシ 沃度量	檢出セ ラレシ量	アルカリニテ沃度ニテ アルカリニテ沃度ニテ	重量法ニテ 重量法ニテ
1	31.1c.c.	0,116652	17,60	17,50	14
2	31.5c.c.	0,116672	17,90	17,50	14
3	31.3c.c.	0,116590	17,78	17,49	14

以上ノ如ク稍々簡便ナル方法ニシテ而モ完全ノ度タル實  
 ニ從來ノモノニ覇タルガ如クナルニヨリ身不肖ヲモ顧ミ  
 ズ實驗セシニ其精密ナル結果ヲ得シコ日本藥局方記載ニ  
 據リシモノニ遙カニ優位ヲ示セリ即チ九%餘ニ對シテ十  
 一%餘ヲ得タリ然レモ前項ノ操作中浸出物ト共ニ浸出液  
 ヲ氣散セシムル場合ニ於テ或ハ藥品ノ粗惡不純ニ因リシ  
 ナランカ記者ノ云フ如ク全ク乾燥セズ之レガ爲メニ乾燥  
 器内ニ於テモ一夜間ニシテ乾燥セズ數日ヲ費セシヲ遺憾  
 ナリトス加之ズ偏蘇兒及ビ嚼囉仿謨酒精混液ニテ浸出ス  
 ルニ於テ例ヒ極メテ徐々ニ流出セシムルモ尙ホ多量ノ液  
 ヲ要セシガ故ニ偏蘇兒ノミニテモ「ソックスレット」氏浸出  
 器ヲ使用スルキハ豈ニ藥品ノ損耗ヲ防グノミナランヤ且  
 ツ嚼囉仿謨酒精混液モ該液ノ沸騰点ニ於テ若シ莫兒比涅  
 ノ變化ヲ受ケザルモノトスレバ反應ヲ檢スベキニ用エシ  
 數滴ノ損失ヲモ減スルヲ得ベシ尙ホ排氣鐘付キ乾燥器ア  
 リト云フ之等ノ点ヲモ改良シテ始メテ完全タルニ非ズヤ  
 今回ノ實驗タル匆卒ノ際ニ於テ行ヒシ結果タルニヨリ敢

テ粗漏杜撰タルヲ免レズ他日機ヲ得テ再ビ第二回ノ結果ヲ報道センコトヲ期ス

○實驗瑣談 (其三)

南 溪 生 稿

(五) 鼻茸ノ擄出ニ由テ治療シタル「エリトロメラルギー」ノ一例

「エリトロメラルギー」(Erythromelalgie)ハ殊ニ肢節ノ末端部ニ疼痛、潮紅及腫脹ヲ來スヲ以テ特異ノ徴ト爲シ且ツ是等ノ症狀ハ通常發作的ニ來ル者ニシテ此名ハ一千八百七十二年米醫ウエール、ミッチェル氏ノ始メテ命ズル所ナリ (Weir Mitchell, Philadelphia med. Times, 1872. S. 81, 113.) 然レモ從來人ノ實驗スル所ニ憑レバ元來本症ハ一種特立ノ疾患ニ非ラズシテ輕重種々ナル原因ニ基ク中樞神經又ハ末稍神經ノ疾患ニ歸スベキ一個ノ複雜症狀ニ外ナラズミッチェル氏ガ最初記述セル所ニ從ヘバ此症ハ通常或ル全身病後或ハ潛行スル熱病後又ハ長キ過勞後偏足

或ハ兩足ニ疼痛ヲ發シ此疼痛ハ最初趾球或ハ跖趾又ハ踵部ニ來ルヲ常トスルモ之ヨリ足蹠、足背、加之ナラズ又下腿ニ蔓延ス然レモ他ノ症ニ在リテハ疼痛ハ最初侵サレタル所ニ限局スルコト有リ又此疼痛ハ間々始メ只晚間ニ發シ夜ヲ徹スルコト有レモ後ニ至レバ亦既ニ朝間ニ始マル者ニシテ時トシテハ只足部ノ過勞後ニ來ルコトアリ或ハ長時間ノ佇立後ニ來ルコトアリ或ハ又下脚ヲ下垂スルニ由テ來ルコト有リ但シ疼痛ノ強度ハ各症甚ダ不同ニシテ或ハ輕度ナルアリ或ハ頗ル劇甚ナルアリ其性質ハ多ク灼熱スルガ如クニシテ冷却ニ由リ(每常然ルニ非ズ)或ハ足部ヲ地平位ニ保ツニ由テ多クハ緩快セラル、モ温暖ニ遇ヘバ増劇ス故ニ夏季ニ於テハ冬季ニ於ケルヨリ該症ノ發作頻多ニシテ且重症ナルヲ常トス而シテ此疼痛發作ニ伴フ者ハ患部ノ潮紅ニシテ此潮紅ハ赤色乃至暗赤色或ハ稍々暗紫色ヲ呈シ其健全部トノ境界ハ稍々明劃ニシテ又處々ニ皮膚靜脈ノ怒張スルヲ認ム而シテ此侵サレタル部分ハ發作時熱灼ヲ呈スルコト多ク且腫脹ス但シ此腫脹タル多クハ一時性

ナルモ發作ノ反覆發來スル者ニ在テハ間歇時ニ於テモ腫脹全ク消退セザルコ有リト云フ蓋シ斯ノ如キノ症狀ハ亦手ニ來ル者ニシテア、オイレンブルク氏ハ嘗テ主トシテ左手ト右足ト交叉性ニ侵サレタル者ヲ見タルコ有リト云ヘリ此他患部ノ皮膚ハ乾燥スルヲ常トスルモ間々手掌及足蹠ニ著シキ汗分泌機ノ亢進ヲ認ムルコ有リ而シテ患部ノ皮膚知覺及運動ニハ通常障礙ノ認ム可キ者ナキモ皮膚ニハ時トシテ高度ノ痛覺過敏ヲ來シ輕微ノ壓迫ニ因ルモ疼痛ヲ發スルコ有リ此他關節殊ニ指趾ノ關節ハ屢々腫起シ且疼痛ノ爲メ大ニ其屈伸運動ヲ妨グルコ有リ蓋シ斯ノ如キ一定ノ複雜症狀ヲ發來スルノ原因ニ至テハ今日尙全ク明瞭ナリト謂フ可ラザルモ其中樞若クハ末梢神經ノ障礙ニ基因スル者ナル可キコハ學者ノ信ズル所ニシテゲ、レウ<sup>井</sup>ン及ベンダノ両氏ハ其原因ニ從ヒ「エリトロメラルギー」ヲ三種ニ區別セリ即チ其第一種ハ疑モ無ク眞正ナル神經中樞ノ器質的疾患ニ因ル者、第二種ハ等シク亦中樞器官ノ疾患ナルモ只官能的障礙ト認ム可キ者

ニ因ル者、而シテ第三種ニ屬スル者ハ末梢神經ノ疾患ニ因ル者ナリ故ニ本症ハ種々ナル腦及脊髓ノ疾患ニ伴發シ或ハ歇斯的里、神經衰弱症ノ如キ一般機能神經症ノ一症トナリ或ハ又或ル疾患ノ反射症狀ト看做ス可キ者ニシテ本來一個特立ノ疾患ニ非ザルヤ寔ニ明カナリトス然レモ獨リデヒヨ<sup>一</sup>氏ハ本症ニ於テ尺骨動脈ノ内膜ニ蔓延性ノ硬化ヲ確認シ尺骨神經ニハ毫モ變化ヲ見ズト云ヒ又ウ<sup>エ</sup>ール、ミッテ<sup>ル</sup>氏ハ神經ニ硬變ヲ認メ其變化著明ニノ殆ンド尋常ノ纖維ヲ見ルコ能ハズ且動脈管ハ著シキ内膜炎(中膜及内膜共ニ)ノ爲メニ甚シク狹窄セル者ヲ見タリト云フ

上述ノ如ク本症ハ種々ノ神經的疾患ニ由テ發スル者ナルヲ以テ亦之ニ伴フ諸般ノ症狀ヲ呈スルコ多シ即チ胃腸障礙、偏頭痛、脊髓性及腦性調失運動、發作性ニ來ル神經障礙、視神經疾患等ハ往々俱發スル所ノ症狀ニシテ、オイレンブルグ氏ハ分娩後只兩手ニ此症ヲ發シタル者ニ於テ肩胛部筋肉ノ榮養障礙ヲ來シタル者ヲ實驗セリト云フ然

リ而シテ本症ニ罹ル者ノ多數ハ年少及中年ノ者ニシテ殊ニ神經的疾患ノ遺傳素因アル者ニ來リ而姓ニ於テハ男子ハ女子ヨリ之ニ侵サル、ト多シト云フモ其比例ハ未ダ確定セラレザル者ノ如シ而シテ之ニ罹ル素因ヲ有スル者ニハ種々ナル器械的、外傷的、温熱的又ハ中毒の害因ニ由リ本症ヲ誘發スルコト有ル者ニシテ麻刺利亞、黴毒、淋疾、癩麻質斯、酒精中毒、寒胃、日射、濕潤、過勞等ハ實ニ亦之ガ誘發原因タルコト有リト云フ近時ア、オイレンブルグ氏ノ實驗セル二十四歳ノ本病患者(男子)ハ墜落ノ際後頭部ニ外傷ヲ蒙リタル者ニシテ稍々歇斯的里ノ素因ヲ有スル者ナリシガ同時ニ左腕ノ運動麻痺及知覺脫失ヲ伴ヒタリト又同氏ノ他ノ二例ニ於テハ過度ナル手ノ使用ニ由テ明カニ本症ノ發作ヲ來スヲ目撃セリト云フ

本症ハ上記特異ノ症狀ニ由リ之ヲ診斷スルコト難カラズト雖モ皮膚ノ潮紅及腫脹ハ滲出性紅斑ニ類スル所アリ又皮膚潮紅シテ疼痛アルハ「アクロパンステジ」ニ似ル所アリト雖モ此症ハ疼痛ヨリモ寧ロ知覺異常(蟻走感)アルヲ

以テ其特徴トス此他「エリトロメリー」、「アクロヂニー」  
「アクロメガリー」、粘液水腫、レノー氏病等モ亦時ニ本病ト鑑別スルノ必要アル者トス而シテ其豫後ニ至テハ原發病ノ種類ニ從ヒ一定ナラズト雖モ概シテ佳良ナル者ニ非ズ從テ諸種ノ療法奏效無キコト少カラズ只疼痛ニ對シテハ冷却及安靜ハ大ニ之ヲ緩解スルノ效アリト又從來之ニ使用セル藥物ハ安知比林、安知歇貌林、撒里失爾酸曹達等ナレモ每常奏効ヲ期ス可カラズ電氣療法ノ如キモ亦無効ニ屬スルコト多シト云フ嘗テデヒョー氏ハ一患者ノ尺骨神經ヲ切除シタルニ小指ノ潮紅、腫起ハ消退シ汗分泌過多モ亦遏止シタルモ疼痛ハ依然トシ消散セザリシト云ヘリ

以上ハ二三ノ成書ニ據テ「アクロメガリー」ノ來歴、症狀、診斷、豫後、療法等ノ梗概ヲ舉ゲタルナリ余ハ昨年(明治三十五年)六月申本病ト診斷セル一患者ノ右側鼻腔ノ閉塞ヲ訴フル者ニ鼻茸腫ノ摘出ヲ施シタルニ偶ニ本病ノ治癒シタル者ヲ實驗セルヲ以テ左ニ其症狀及經過ヲ記錄シ以テ後日ノ參攷ニ資セントス

患者加藤某、二十一歳ノ既婚婦、金澤市ニ住ス其父母ハ患者幼齡ノ時死亡セルヲ以テ其病名ヲ詳ニセズ一姉一妹アリ前者ハ二十五歳ニシテ健存スルモ妹ハ三歳ノ時死亡セリ而シテ患者ノ告グル所ニ據レバ其血族中ニハ曾テ遺傳性ノ疾病ニ罹リタル者無シト云フ

患者生來強健ニシテ幼時種痘及麻疹ヲ經過シ十五歳ノ時月華始メテ開キ爾來毎月經行ノ期ヲ違ヘルコトナカリシモ時ニ稍々多量ナルコトアリシ、同年妊娠シタルモ八ヶ月ニテ早産シ兒ハ直ニ死亡セリ其後時々白帶下アルヲ覺ユト又十七歳ノ時左右ノ肘關節及腕關節ニ痠麻質斯痛ヲ起シ一ヶ月ニシテ治癒シタルモ爾後每年秋季ニ至レバ同症ヲ發スト云フ

本年(明治三十五年)一月中旬頃ヨリ偶々偏側ノ手指殊ニ第二乃至第五指ノ掌面ニ宛モ刺スガ如キ「チク」ノ疼痛感覺アリテ其部ハ始メ赤色ノ小斑ヲ呈スルモ次第一汎ニ赤色ヲ呈シ此際指背ニモ潮紅ヲ來シ同時ニ指關節(殊ニ第一指骨間關節)ニ腫起疼痛ヲ起シ爲ニ十分

手指ヲ屈伸スルコト能ハザルコトヲ發見シ次第潮紅ハ殆ド前膊ノ下三分一部ノ所ニ達スルモ指ハ次第紫赤色ニ變ズルヲ常トシ(拇指ハ侵サレザルコト多シ)此際ニ至レバ指ノ紫赤色部殊ニ其末節及上記ノ關節ニ疼痛ヲ發ス此間ノ持續ハ大抵二十分間許ニシテ該症消散スルモ次第又他側手指ニモ之ト同様ノ變化ヲ來シ更ニ又兩側ノ足部ニモ同一ノ症狀ヲ呈セリ即チ足部ニ於テモ「チク」刺スガ如キ疼痛ヲ起スモ此疼痛ハ只趾ノ蹠面ニノミ限局シ足背ハ末端ヨリ中央ニ至ル迄紫赤色ヲ呈スレモ皮膚ノ潮紅ハ下腿下三分一部ノ所ニ迄達スルコトアリ此發作ハ爾來毎日時ヲ定メズノ來リ一日數回發作スルコト有リ又其發作ハ左手ニ始マリ次デ右手ニ及ブコト有リ或ハ之ニ反スルコト有リ或ハ右手ニ始マリ右足ニ及ブコト有リ或ハ又左手ニ始マリ左足ニ及ブコト有リ或ハ時トメ足部ニ始マリ次デ手部ノ侵サル、コト有リト云フ

此他患者ハ前症發來ノ頃ヨリ右側鼻腔ノ閉塞スルヲ覺へ且右前頭半側ニ限局セル頭痛ニ惱メリト云フ

尙患者ノ訴フル所ニ憑レバ上記鼻腔ノ閉塞ト右前頭ノ偏頭痛ノ他ニハ前症發作ノ際モ又發作ノ間歇時ニ於テモ毫モ他ニ神身ノ異常ヲ覺ヘズト云フ而シテ該患者ハ一ヶ月許手足ニ電氣療法ヲ受ケタルコト有リシモ毫モ其效無ク且鼻腔閉塞ノ感益々増悪スルヲ以テ専ラ鼻ノ症狀ヲ以テ四月一日我外科部ニ來リ診ヲ乞ヘリト當時右側鼻腔ノ粘膜著シク肥厚スルヲ認メタルヲ以テ翌二日外來診察所ニ於テ電氣器灼器ヲ用キ患部ヲ燒灼セシマアリ次デ一ヶ月許ヲ經テ鼻茸ヲ發見セシヲ以テ之ガ摘出ヲ謀リタルモ鼻腔快通スルニ至ラザリシヲ以テ六月十日患者ニ入院ヲ命ジ同月十三日半麻酔ノ下ニ鼻茸摘出術ヲ施シタリ此手術ヲ施シ爲メニ右側鼻腔快通セシヨリ以來ハ一月中旬來毎日發作セシ所ノ手足ノ潮紅、腫脹及疼痛ハ十七日ニ至ルマデ五日間全ク消散シタリシモ十八日ニ至リテ右側小指ニ少シク「チク／＼」ノ刺痛感ヲ起セリ然レモ皮膚ニハ毫モ潮紅腫脹ヲ來サザリシ而シテ術後右側前頭痛モ亦全ク治癒シ患者大ニ神身

ノ爽快ヲ覺ユルニ至レリ然ルニ同月二十三日ニ至リ左足背ニ少シク潮紅ヲ來シ二十分時ニシテ消散シ次デ左右ノ手指(拇指ヲ除ク)ニモ僅カニ潮紅ヲ來シタレモ疼痛ハ無カリシ、斯クテ二十四、二十五ノ兩日ハ毫モ發作無カリシモ二十七日ニ至リ再ビ左右足趾ノ前半部ニ少シク「チク／＼」ノ感アリ且之ニ對スル足背ニ僅カニ潮紅ヲ來セリ其後七月三日ニ至ルマデ時ニ少シク指趾ニ「チク／＼」ノ感及輕度ノ潮紅ヲ來シタルコト有リタレモ患者殆ンド病苦ノ身ニ在ルヲ忘レタルニ至リタルヲ以テ退院セリ

余ノ此例ニ就テ考察スルニ本患者ノ手足ニ發作的ニ發來セル一種ノ複雜症狀即チ其潮紅、腫脹及疼痛ハ蓋シウエール、ミッチェル氏ノ所謂「エリトロメラルギー」ニシテ恐ク鼻茸ニ基因シタル反射的機能神經症ノ一症ト認ム可キ者ナラム歟

\* \* \* \* \*

孫  
錄

○鼻硬腫性茸腫及鼻硬腫診斷ノ

實驗法ニ就テ

(Centralblatt f. Chirurgie, 1903, Nr. 18.)

露國キーウノプロフェッソル、ア、デ、パウロウスキー  
Pawlowski 氏ハ先ヅ一千八百九十一年一月モスコウ府  
ニ開カレタル第四回露西亞醫學會外科部會ニ於テ鼻腔内  
ニ於テ茸腫狀ニ發生シタル鼻硬腫(鼻硬腫性茸腫 Rhinor-  
skleromypolypen) ノ二例ヲ報告シタルヲ叙シ此茸腫ハ  
只右側鼻腔ニノミ發生シ手術後之ヲ鏡檢シタルニ鼻硬腫  
ニ特有ノ組織構造即チミクリッツ氏細胞、透明體及フリ  
ツシユ氏有囊黴菌ヲ証明シ得タルヲ述ベ更ニ一千九百二  
年十一月之ニ類似シタル一例ヲ實驗セリト云フ此患者ハ  
五十二歳ノ男子ニシテ五年以來慢性鼻感冒、呼吸碍障及

左鼻孔ヨリノ出血ニ惱ミタル者ナリシガ始メ黴毒、結核  
及慢性鼻炎ナル診斷ノ下ニ治療ヲ加ヘタリシニ精密ナル  
検査ニ由テ左鼻腔ニ於テ下及中甲介ノ間ニ稍硬固ナル肝  
脈狀茸腫様ノ腫瘍アルヲ認メタルモ鼻及鼻翼ノ皮膚並  
ニ鼻ノ外形ニハ毫モ變常ヲ見ズハイモル氏實内ニモ亦少  
シモ變化ヲ認メザリシ然ルニ白金篋ヲ以テ腫瘍ノ表面ヨ  
リ其一部ヲ採リ之ヲ寒天培養基ニ植ヘタルニ鼻硬腫菌ノ  
純粹培養ヲ得タリ依テ切除セル腫瘍ノ小片ヲ鏡檢シタル  
ニ果シテ鼻硬腫ニ特有ナル組織構成ヲ認メタリ即チ該組  
織ハ大ナルミクリッツ氏細胞、「ヒアリン」體及多數ノフ  
リツシユ氏菌ヲ有スル肉芽腫ノ構造ヲ有シタリト此他著者  
ハ本病ノ診斷ニ他ノ一法ヲ用キタリ氏ノ説ニ據レバ此法  
ニ從フキハ診斷確實ニシテ而カモ迅速ニ之ヲ決定シ得ベ  
シト云フ即チ氏ハ得タル所ノ鼻硬腫菌ノ培養ヲ温メタル  
寒天ト共ニ二三ノ海豚ノ腹腔内ニ注射セリ動物ハ通常二  
十四時間乃至四十八時間ノ後ニ死亡スルヲ以テ腹腔ノ滲  
出物ヨリ鏡檢ニ由リ美麗ナル囊ヲ有スル鼻硬腫菌ヲ証明

シ得可シ又此死シタル動物ノ諸内臓器例之バ心臟、血液、  
 肝臟、脾臟、腎臟、骨髓等ヨリモ上記黴菌ノ純粹培養ヲ  
 培養シ得可シト云フ故ニ上記ノ法ニ據ルキハ海豚ニ於テ  
 ハ死ニ至ルベキ鼻硬腫菌ノ全身傳染ヲ起サシムルコトヲ得  
 ベキ者ニシテ之ニ由テ又該菌ノ腹膜腔ヨリ甚ダ速カニ諸  
 内臓器及諸組織内ニ傳播スル者タルヲ知ルヲ得ベシ但シ  
 彼ノ鼻硬腫菌ニ酷似セル「オツエナ」ノ黴菌及他ノ有黴菌  
 (リードレンデル氏黴菌ノ如キ)ハ寒天ト共ニ腹膜腔内ニ  
 注射スルモ海豚ニ於テハ致死的傳染ヲ來スコト無シ蓋シ著  
 者ノ亦謂ヘルガ如ク氏ノ實驗セル如キ鼻硬腫ハ甚ダ稀有  
 ノ症ナルベク而シテ氏ノ此報告ニ於テ尙他ニ主要トスル  
 所ハ斯ノ如キ症ニ於テモ上述ノ如ク黴菌ノ寒天培養ヲ寒  
 天ト共ニ腹膜腔内ニ注射シ鏡檢ヲ施スキハ容易ニ之ヲ診斷  
 シ得可シト云フニ在リ (南溪抄)

○早期ニ於ケル乳腺黴毒

(Wiener Klin. Wochenschrift. 1902. Nr. 40.)

後期ニ於ケル乳腺黴毒ハ通常極メテ徐々ニ發生シ限局セ

ル結節狀浸潤即チ真正ノ護膜腫ヲ呈シ時ニ其癌腫、腺腫  
 又ハ纖維腫ト誤診セラル、コト有ルモ早期ニ於テハ數日ノ  
 間ニ稍々瀰蔓性ノ乳腺ノ腫脹ヲ來シ多クハ其偏側ヲ侵ス  
 モ時トシテハ兩側ニ來リ比較的速ニ蔓延シ輕度ノ炎性症  
 狀及疼痛ヲ起ス者ニシテ此症ハ稀有ナルモ傳染後一ケ年ノ  
 間ニ來ルコト多シマテナツメル Matzenauer 氏ノ實驗セル  
 一例ニ於テハ乳腺組織ノ化膿性溶崩ヲ來シタル者ニノ斯  
 ノ如キハ從來人ノ未ダ經驗セザル所ナリ故ニ本症ハ類症  
 鑑別上亦外科醫ノ宜シク注意スベキ所ナリト (南溪抄)

○淋菌肺炎ノ一例

(München med. Wochenschrift. 1903. No. 13.)

ブレッセル Bressel 氏ハ三十二歳ノ男子ニシテ淋疾ニ罹  
 レル者ニ同時ニ淋菌性肺炎ヲ併發セル症ヲ報告セリ即チ  
 該患者ノ醜色ナル咯痰中ニハ血液ヲ混ゼザルモ鏡檢上複  
 球菌ノ種々ナル小群簇ヲ認メ其狀態ニ於テモ又殊ニ其細  
 胞内ニ存在スルニ由リテモ該複球菌ハ淋疾球菌タルコト疑  
 ヲ容レズ該菌ハグラーム氏法ニ由テ脱色セリ又中靜脈ヨ

リ採取シタル血液ヨリノ第三日ノ始メニ十一個ノ小ナル灰白色ノ群簇ノ發育スルヲ認メ此群簇ハ肉眼的ニテモ全ク淋疾球菌ノ群簇ニ異ナルヲ無カリシガ鏡檢上全ク其診斷ヲ確定セリ而シテ本菌ノ純粹培養ノ状態ハ最モ特異ニ次デ之ヲ血液加寒天ニ培養スルヲ得タレモ純粹ノ寒天ニハ培養スルヲ得ザリシト著者ハ之ニ類似セル症例ハ從來未ダ文獻上ニ見ザル所ナリト云ヘリ (南溪抄)

### ○淋疾性ノ皮膚潰瘍ニ就テ

(Münchener med. Wochenschrift, 1903. Nr. 9.)

オスカー、サロモン、Oskar Salomon 氏ハ二十歳ノ酒店ノ下女ニシテ尿道及膾ヨリ著シキ帶下アル者ノ左右ノ小陰脣上ニ各一個ノ許多ノ淋疾球菌ヲ有スル潰瘍ヲ呈スル稀有ノ症ヲ報告セリ但シ左側ノ潰瘍ハ右側潰瘍ノ發生後第九日ニ顯ハレタル者ニシテ兩潰瘍ハ左右同一部ニ在リ而シテ此潰瘍ニ特異ナル點ハ銳利ナル刀ニテ抉出セラレタル切創ニ類似シ圈狀ニシテ疼痛甚シク且著シク出血スルニ在リ第一ノ潰瘍内ニハ後ニ至リ淋疾球菌ノ他ニ許多

ノ白色及橙黃色葡萄狀球菌ヲ存シタリシモ第二ノ潰瘍内ニハ唯淋疾球菌ヲノミ存シ他ノ微菌ヲ混在セザリシト又切除シタル組織ノ切片標本中ニモ許多ノ細胞内複球菌ヲ認メタリシガ是レ必ズ淋疾球菌ナラント而シテ第一ノ潰瘍ハ三十七日ニシテ治癒シ第二ノ者ハ二十八日ニシテ治癒シタリシガ前者ニ於テハ淋疾球菌ハ二十三日ノ後ニ消失シ後者ニ於テハ十四日ニシテ消失セリ著者ハ以爲ラク上記ノ潰瘍ハ元ト二個ノ膿瘍ノ破壊ニ由テ發シタル者ニシテ病毒ノ傳染ハ淋巴道ニ由ラズ恐ク搔爬セル創面ヨリ傳染シタル者ナラント然レモ著者ハ此潰瘍ノ元來眞ニ膿瘍ナリシヤ或ハ原發性潰瘍ナリシヤノ疑問ニ就テハ明確ナル判斷ヲ下ササルナリ (南溪抄)

### ○男性小兒ノ淋疾性尿道炎ニ就テ

(Münchener med. Wochenschrift, 1902. No. 46)

從來吾人ノ知ルガ如ク男兒ハ小女ヨリモ淋疾ニ罹ルコト少キ者ナルガ著者フツシエル Fischer 氏ハ「リテラツ

ル」ヨリ男兒ノ淋疾患者六十九例ヲ輯メ之ニ尙二例ヲ追加セリ而シテ氏ノ所論ニ於テ殊ニ茲ニ記載ヲ要スベキハ次ノ七項トス即チ(一)男兒ニ於ケル淋疾ハ龜頭炎若クハ龜頭包皮炎ヲ伴フコト甚ダ多ク就中包皮ノ狹ク且ツ長キ者ニ於テ然リ(二)後部尿道ノ侵サレタル者ハ五〇%ナリ(三)疼痛性勃起ハ一モ記載セラレズ又攝護腺炎ヲ起シタル者アルコトナシ(四)夜中遺尿ハ屢々認めラレタリ(五)女兒ハ罕ナラザルモ男兒ニ在テハ淋疾ニ關節癱瘓質斯ヲ繼發スルコト甚ダ稀ナルガ如シ(六)淋疾ニ基因スル尿道狹窄ハ男兒ニ於テモ決シテ稀有ナラズ(七)童兒ノ淋疾ハ大人ニ於ケルヨリモ遙カニ急劇ノ症狀ヲ呈スルコト多ク且尿道後部ヲ侵スコト亦甚ダ急速ナリ而シテ合併症トシテハ上記ノ外尙淋巴管炎、淋巴腺炎、膀胱炎及副睪丸炎ヲ來シ四十例ニ於テ傳染路ノ確實ナルハ(一)交接ヲ試ミタルニ因ル傳染(二)淋疾ニ罹レル男兒、小女或ハ成年男子トノ同衾又ハ親密ナル交際(交接ニ非ズ)(三)婦人ノ手當又ハ看護人ニ因ル偶然ノ傳染(四)衣服等ニ因ル間接ノ傳染及(五)

破倫ノ行爲ニ因ル傳染ナリ然レモ最後ノ者ハ小兒ノ淋疾ノ原因タルコト最モ少數ヲ占ム(凡ソ一%ニ過ギズ)此事タル法醫學上特ニ注意スベキトスト (南溪抄)

### ○絶望的大出血ノ場合ニ於ケル

止血藥トシテノ「アドレナリ

ン」ノ使用ニ就テ

(München med. Wochenschrift, 1903, Nr. 2.)

オ、ランゲ O. Lauge 氏ハ重症ノ出血ニシテ他藥物ノ毫モ止血ノ効ナキ場合ニ於テ鹽化「アドレナリン」溶液ヲ使用シテ屢々即效ヲ見タリト云フ即チ氏ハ外部ノ出血ニ於テハ其稀薄ノ溶液(生理的食鹽水ヲ等分ニ混和シタルモノ)ヲ綿紗片ニ浸漬シテ創面ヲ壓抵シ或ハ之ヲ栓塞シタリシニ止血ノ傍ラ又著シク創液分泌ノ減少ヲ見タリト云フ又氏ハ「アドレナリン」ヲ外用ノミナラズ内服ニモ用キタリ即チ咯血及吐血患者ニ二時間内ニ二回三十滴ヲ與ヘタルニ速カニ奏効セリト云フ (南溪抄)

### ○甲狀腺ノ結核(結核性甲狀腺腫)

(Wiener klin. Wochenschrift. 1902. Nr. 48.)

コレバ、クレールモン P. Clairmont 氏ノ報告スル所ニ

シテ患者ハ二歳ノ健全ナリシ小兒ナリシガ二三週日ノ間ニ甲狀腺部ニ速カニ増大スル腫瘍ヲ發シ益々呼吸障碍ヲ起スニ至リタルヲ以テ手術ヲ施ストナリタル者ナリ腫瘍ハ恰モ甲狀腺ノ部位ニ在リテ表在性ノ灰白黃色ニ變色セル筋ト癒著シ其内部ニ數多ノ乾酪化セル竈ヲ有セリ依テ之ヲ外觀的健全ノ部ニ於テ摘出セリ組織的檢査ニヨリ該腫瘍ハ結核性肉芽組織ヨリ成ル者タルヲ知リタリシガ半年ノ後尙殘リ居リタル瘻ヨリ再發ヲ來シ再ビ小林檜大ノ硬キ腫瘍ヲ發生セリ此際腫瘍ハ氣管ト密ニ癒著シ甲狀腺ノ側棄ヲ侵シタリシガ摘出ノ結果又其結核性組織ヨリ成ル者タルヲ證明セリ該小兒ニハ他部ニ臨床上結核ト認ムベキ症狀ナカリシモ此甲狀腺結核ハ原發性ノ者ナリヤ將タ繼發性ノ者ナリヤノ興味アル疑問ハ解釋セラレザリシ蓋シ本症ト同一ノ症ハ從來只四例ノ報告アルノミニ

本症ヲ追加シテ五例トナルベキモ今日ノ所ニテハ原發性甲狀腺結核ノ存否ハ未ダ證明セラレズト云ヘリ (南漢抄)

### ○膀胱結核及其療法

(Deutsch. med. Zeitung. 1903. No. 7.)

著者レオポルド、カスペル Leopold Casper 氏ハ膀胱結核ハ殆ンド皆同時ニ他臟器殊ニ肺臟、腎臟及生殖器(精囊、睪丸、副睪丸、攝護腺)ノ結核ト合併シ來ルモ本症ハ其症候及經過並ニ療法ニ於テ大ニ他ノ膀胱炎ト區別スベキモノアルヲ以テ特殊ノ疾患トシテ論述セリ著者ノ說ニヨレバ原發性膀胱結核ナル者ハ之レ無キモノニシテ其發生ノ誘因トナルベキ者ハ尿道淋疾ナルト甚ダ少カラズ實ニ本症ハ從來人ノ信シタルヨリモ膀胱結核ノ原因タルト多キモノナリト又著者ハ結核性ノ人ト交接シテ泌尿生殖器ノ結核ヲ感染スルトハ極メテ罕ナリト云ヘリ而シテ氏ハ解剖上ヨリ本來ノ膀胱結核ヲ結核性膀胱炎ト區別セリ結核性膀胱炎ノ症候ハ殊ニ患者ニ苦惱ヲ與フル尿意窘迫ニシテ此症ハ只溫坐浴又ハ強キ麻醉藥ニ由テ一時輕快

スルノミ又尿ハ酸性ニシテ多量ノ膿ヲ含有シ常ニ膀胱出血ヲ伴フ但シ蛋白ノ含有ハ之ニ特異ナラズ最モ確實ナル徵候ハ固ヨリ尿中ニ結核菌ヲ發見スルニ在レモ之ヲ闕如スルキハ其診斷容易ナラザルヲ有リ然レモ膀胱炎性尿中ニ他種ノ微菌ヲ闕如スルキハ大ニ本症ノ疑ヲ起サシム著者ハ此疑問ヲ決センガ爲メニ接種法ヲ稱揚セリ又本症ノ診斷ヲ確定スルニ肝要ナルハ結核性膀胱炎ニ於テハ爾餘ノ膀胱炎ニ反シ屢々其發生ノ原因ヲ缺クニ在リ此他結核性膀胱炎ニ特異ナルハ膀胱ノ非常ニ過敏ナルト又殊ニ臨床上肝要ナルハ之ニ對スル療法ノ影響ナリ即チ膀胱炎ニシテ普通ノ膀胱炎療法ヲ施スモ輕快セズ或ハ却テ増悪スル者ハ多クハ結核性ノ者ナリ何トナレバ惡性ナル腫瘍ヲ合併スル膀胱炎ヲ除クキハ諸他ノ膀胱炎ハ殆ンド皆適當ナル洗滌ニ由テ輕快スルモノナレバナリ而シテ著者ハ結核性膀胱炎ノ療法トシテ第一ニ他臟器ノ結核ニ於ケルト同じク先ヅ一般ノ衛生的、攝生の療法ヲ施シ内服ニハ強壯藥ヲ用キ結核症ニ對シテハ只炭酸「グアヤコール」ト「イ

ヒテオール」トヲ用キタリ氏ノ實驗ニ據レハ局所ニ對シテ最モ有効ナルハ乳酸及昇汞ニシテ昇汞ハグヨン氏ノ點滴法ニ從ヒ千倍乃至一萬倍ノ溶液五至乃至五十立方仙迷ヲ毎週多クモ二回注入セリ硝酸銀ハ氏ノ經驗ニ據レバ疼痛ヲ増劇セシムルヲ以テ使用セザリシ而シテ其他ノ局所療法モ氏ハ一切廢棄シテ用キザリシト云フ (南溪抄)

### ○微毒性胃腫瘍ノ一新例報告

(Münchener med. Wochenschrift. 1902. No. 48.)

マックス、アインホルン Max Einhorn 氏ノ報告ニ曰ク四十二歳ノ男子十二年前微毒ヲ傳染シ七年前來胃痛、食思不振及輕度ノ便秘ヲ訴ヘタル者心窩部ニ於テ劔狀突起ノ下方約二指幅ノ所ニ胃ノ直上ニ當リ表面突兀タル縱五仙迷、幅二仙迷ノ腫瘍ヲ存シタリシガ胃液検査上遊離ノ鹽酸アリ患者ハ七年間ノ病苦ノ間ニ只僅ニ體量ヲ失ヒタルノミナリシ著者ハ之ヲ胃ノ護膜腫ト診斷シ之ニ驅微療法ヲ施シタルニ該腫瘍ハ六週日ニシテ全ク消散シ患者健全ニ復シタリト云フ (南溪抄)

○ 黴毒ニ基因スル單尿管崩症

(Wiener med. Presse, 1902, No. 32.)

エム、フォン、ツァイスル M. v. Zeissl 氏ノ報告ニ四十六歳ノ女子凡ソ九年前其夫ヨリ黴毒ヲ感染シタリシガ爾後不完全ナル驅黴療法ヲ行ヒ數年來舌ニ糜爛面ヲ呈シタルモノニ尿ヲ放任シ其漸ク増悪スルニ至リ醫療ヲ求メタルモノニ尿量ノ増加ト甚シキ口喝トヲ認メタリシガ尿量ハ廿四時間中五「リートル」半以上ニ達シタルモ糖ハ闕如セリ氏ハ之ニ琥珀酸「イミード」水銀 (本藥ハ吸收速ニノ奏効早キモ長ク體內ニ留ルノ利アリ故ニ著者ハ之ヲ稱用スト云フ)ヲ注射シタルニ多尿症及口喝ハ全ク消散セリ該患者ニハ自覺的ニモ他覺的ニモ毫モ腦ノ症狀ヲ見ズ又尿中ニ少量ノ蛋白ヲ存シタルヲ以テ觀レバ此尿管崩症ハ恐ク黴毒ノ爲腎臟ニ病變ヲ起シタルニ因ル者ナラムト云ヘリ (南溪抄)

○ 治癒シタル黴毒性兩側後筋麻痺

ノ一例

(Münchener med. Wochenschrift, 1902, No. 45.)

エフ、スタインハウス F. Steinhaus 氏ハ次ノ如キ興味アル一例ヲ報告セリ曰ク三十九歳ノ黴毒患者ニシテ近來兩脚ノ腱反射著シク亢進シ瞳孔反射遲滯シ左側大腿ノ後側殊ニ坐骨神經ノ出口部ニ疼痛アル者ニ俄然兩側ノ後筋麻痺ヲ來シ爲メニ高度ノ吸氣困難ヲ來シタリシガ該麻痺ハ強烈ナル驅黴療法 (毎日琥珀酸「イミード」水銀ヲ注射シ沃度加里ヲ内服セシメタリ) ノ下ニ氣管切開術ヲ要スルニ至ラズシテ二三周日ニシテ全ク治癒シ脚部ノ疼痛モ亦全然消散シタリ故ニ此後筋麻痺ハ黴毒ニ基因スルコト疑ヲ容レザル所ニシテ著者ハ恐ク返廻神經末梢ノ疾患ニ因テ發シタル者ナラントシ脚ノ症狀モ黴毒性坐骨神經炎ナラントセリ但シ著者ハ又本症ニ於ケル後筋麻痺及爾他ノ諸症狀ハ亦初期ノ腦黴毒ノ症候若クハ脊髓勞ノ初徵ト看做スコトヲ得ベシト論ゼリ (南溪抄)

○ 弗蘭僱刺皮及「カスカラ、サグラ

ダ」皮ノ有効成分ノ定量ニ就テ

(Zeitschrift f. analyt. Chemie, 1903, 3. Heft.)

Victor Schmelta 氏ハ有効ナル「エモジン」ヲ驗知センカ  
爲メ左ノ比色法ヲ發表セリ

今本檢定ニ供センカ爲メ調製セル十「グラム」ノ流動越幾  
斯ヲ六乃至七「センチメートル」ノ直徑ヲ有スル陶製蒸發  
皿内ニ於テ約三「グラム」ニ至ル迄蒸發シ其殘渣ニ攪拌シ  
ツ、二十立方「センチメートル」ノ亞爾簡保爾(九十五%)  
ヲ注加シ綿ヲ以テ硝子壺中ニ濾過シ殘渣ヲ尙參回毎十五  
立方「センチメートル」ノ同強度ヲ有スル亞爾簡保爾ニテ洗  
滌シ其亞爾簡保爾ヲ水浴上ニ於テ驅除シ得タル蒸發殘留  
物ヲ溫場ニテ處置シ其溶液ヲ冷後約百立方「センチメー  
トル」ノ内容ヲ有スル分液漏斗中ニ注入シ之ニ一二滴ノ  
稀鹽酸ヲ加ヘ后之ニ二三回約二十立方「センチメートル」ノ  
噶囉仿謨ヲ加ヘ振盪シ合一セル噶囉仿謨分ヲ蒸餾シ噶囉  
仿謨ヲ注意シテ揮散セシメ其際殘留セル結晶性殘渣ヲ僅  
少ノ那篤倫滴液中ニ溶解セシメ而シテ五百立方「センチ  
メートル」中約〇、〇一「グラム」ノ前ニ調製セル可檢「エ  
モジン」液ト同色ヲ呈スルニ至ル迄微溫湯ヲ加ヘテ稀薄

スルニアリ溶液ノ比較ニハ通常薄壁ノ硝子圓筒ヲ用ユレ  
ハ足レリト雖 O. H. Wolf 氏ノ賞用スル比色器ヲ使用ス  
ルヲ良トスト

今「カスカラ、サグラダ」中「エモジン」ノ定量ニ著者ハ該  
方法ヲ少シク改良シ次ノ如クセリ即チ上ノ亞爾簡保爾性  
溶液ノ蒸發殘留物ヲ少許ノ那篤倫滴液ヲ以テ亞爾加里性  
トナシ溶解シ其溶液ヲ分液漏斗中ニ注加スルニアリ

次テ之ニ二十立方「センチメートル」ノ噶囉仿謨ヲ加ヘ最  
モ注意シテ絶エス回轉シツ、酸性反應ヲ呈スルニ至ル迄  
一二滴ノ鹽酸ヲ加ヘ能ク振盪シ噶囉仿謨分ヲ分別シ該液  
ヲ再ヒ那篤倫滴液ヲ以テ亞爾加里性トナシ二十立方「セ  
ンチメートル」ノ噶囉仿謨ヲ加ヘ次テ酸性反應ヲ呈スル  
ニ至ル迄鹽酸ヲ和シ能ク振盪シ噶囉仿謨分ヲ分取シ此ノ全  
操作ヲ尙二回反覆シ合一セル噶囉仿謨分ヲ蒸餾シ而シテ  
他ニ於テハ上ニ示サレタル如ク處置スルニ在リ (謙中抄)

### ○尿中大黃ノ檢定

(Zeitschrift f. analyt. Chemie, 1903, 3, Heft)

E. Proksch 氏ノ經驗ニ依レハ大黃ノ服用後排泄セル尿ハ糖分檢定ニ際シ容易ク誤解ヲ導クモノナリ何トナレハ大黃尿ハ亞爾加里性酒石酸銅液并ニ酒石酸蒼鉛液ヲ還元スレハナリ、依テ著者ハ大黃尿ナルヲ証センカ爲メ次ノ反應ヲ示セリ

一、尿ニ鹽酸ヲ加ヘ酸性トナシ「キシロール」ヲ加ヘ振盪シ其「キシロール」層ヲ分離シ加里滲液上ニ該「キシロール」液ヲ加ヘ二液層ヲ作ラシムベシ若シ大黃尿ナレハ五乃至十分後其接界面ニ蓄積色ノ輪帶ヲ生ス  
二、「キシロール」ノ場合ニ嘔囉仿謨ヲ使用スルキハ紫色ノ輪帶ヲ生ス

三、尿ニ亞硫酸ヲ加ヘ次テ嘔囉仿謨ト振盪シ分離セル嘔囉仿謨層ニ加里滲液ヲ附加スレハ蓄積紅色ヲ呈ス

四、尿ニ「スルフアニール」酸ヲ加ヘ「キシロール」ト振盪スレハ下部ナル水層ハ葡萄酒赤色ヲ呈シ其際「キシロール」層ハ鮮蓄積色ヲ呈スベシト (謙中抄)

### ○華攝林中他ノ脂肪ノ檢定ニ就テ

(Fresenius, Zeitschrift. f. analyt. Chemie, 1903. 3. Heft.)

La Beole 氏及 Dupin 氏ハ五「グラム」ノ華攝林ニ五滴ノ過滿俺酸加留謨液ヲ加ヘ乳鉢内ニ混和スルヲ賞用ス其際純粹華攝林ニアリテハ蓄積紅色ヲ呈スルニ止マレハ脂肪ヲ夾雜スルモノニアリテハ直チニ過滿俺酸加留謨ノ還元ニヨリ栗褐色ニ變化スベシ此褐色ノ度ニ從ヒ附加サレタル脂肪量ヲ決定スルヲ得ベシト (謙中抄)

\* \* \* \* \*

### 漫 錄

#### ○古の水と今の水と 霜 坪

江海満々たる水も、葉上一滴の露も、其水たるに於てハ今猶古のごとし、豈に水に古今の別あるべけんや、然れ

ども古人の觀たる所の水と、今人の觀る所の水との、ろの間亦大に逕庭なきを得む、但今人の觀る所の水は皆人の知る所、故に爰には唯粵の醫人新井了庵が輯めたる所により、水の飲食及醫療に關るもの數種に就て、古人の觀たる水の一斑を紹介せむとす。

井泉水。井水新汲、療病利人、平且第一汲爲井華水、其功極廣、又與諸水不同、凡井水有遠縱地脈來者爲上、有從近處江湖滲來者次之、其城市近溝渠污水雜入者成鹵、

用須煎滾停一時俟鹵澄乃用之、否則氣味俱惡、不甚入藥食茶酒也、雨後水渾、須種入桃杏水澄之(注穎)○井泉地脈也、人之經血象之、須取其土厚水深源遠而質潔者食用可也、凡井以黑鉛爲底、能清水散結、人飲之無疾、入丹砂鎮之、令人多壽。

井華水。酒後熱痢、洗目中膚翳、治人大驚九竅四肢指岐皆出血、以水嚙面、和朱砂服、令人好顏色鎮心安神治口臭、堪鍊諸藥石、投酒醋令不腐。

新汲水。消渴、反胃、熱痢、熱淋、小便赤澁、却邪調中、

下熱氣、並宜飲之、射癰腫令散、洗漆瘡、治墜損腸出、冷噴其身面、則腸自入也、又解閉口椒毒、下魚骨哽、○葉氏曰、衄血不止、用新汲水、隨左右洗足、即止、累用有效、又方、冷水浸紙、貼額上、以熨斗熨之立止、○金瘡出血不止、冷水浸之即止(延壽方)○服藥過劑、卒嘔不止、飲新汲水一升、又方、魚骨哽咽、取水一盃、合口向水張口取水氣、哽當自下(肘後方)○眼睛突出一二寸者、

以新汲水灌漬睛中、數易之自入(梅師方)○霍亂吐瀉、勿食熱物、飲冷水一盃、仍以水一盆浸兩足、立止(救急良方)○初生不啼、取冷水灌之、外以葱白莖細鞭之、即啼

(全幼心鑑)○燒酒醉死、急以新汲水浸其髮、外以故帛浸濕貼其胸膈、仍細細灌之(集簡方)

流水(千里水又東流水) 主五勞七傷、腎虛脾弱、陽盛陰虛、不能曠及霍乾吐利傷寒後、欲作奔豚(時珍)○治頭必歸於下、故治五勞七傷羸弱之病、煎藥宜以陳蘆勞水、取其水不强火不盛也、無江水、則以千里東流水代之(思邈)

○東流水取其性順疾速通膈下關也、倒流水取其回旋流止

上而不下也(宗薩)

急流水 正傳曰、湍上峻急之水、其性急速而下達、故通

二便、風痺之藥用之○昔有患小便悶者、衆工不能治、令

取長川急流之水煎前藥、一飲立洩、則水不擇乎(張從正)

逆流水 中風、卒厥、頭風、瘧疾、咽喉諸病、宜吐痰飲

(時珍)○正傳曰、洄瀾之水、其性逆而倒上、故發痰飲之

藥用之也。

玉井水 諸有玉處山谷、水泉皆有猶潤於草木、何況於人

乎、夫人有毛髮、如山之草木、故山有玉而草木潤、身有

玉而毛髮里、大華山有玉水、人得服之長生、玉既重寶、

水又靈長、故能延生、之望今人近山多壽者、豈非玉石之

津乎、故引水爲玉證(疏義)

山岩泉井(又好井水) 此山岩石間所出泉流、爲溪澗者

也、爾雅云、其泉源遠清冷、或山有玉石美草木者爲良、

其山有黑土毒石惡草者、不可用(時珍)○霍亂、煩悶、嘔

吐腹空、轉筋忍入腹、宜多服之、名曰洗腸、勿令空空、

則更服、人皆懼之、然嘗試有効、但身冷力弱者、防致臟

寒、當以意消息之。

溫湯一名溫泉 諸風筋骨攣縮及皮頑痺手足不遂、無眉髮、

疥癬諸疾在皮膚骨筋者、入浴、浴訖當大虛憊、可隨病與

藥及飲食補養、非有病入、不宜輕入○廬山有溫泉、方士

往往教患疥癬風癩楊梅瘡者、飽食入池久浴、得汗出乃止、

旬日自愈也。

碧海水 糞浴去風癢疥癬、飲一合吐下宿食臚脹。

熱湯一各百沸湯又大和湯 按注穎曰、熱湯須百沸者佳、

若半沸者飲之、反傷元氣作脹、或云、熱漱湯口、損齒病

目、人勿以熱湯洗浴、凍僵人、勿以熱湯濯足、能脫指甲、

銅瓶煎湯、服損人之聲(時珍)○慰霍亂轉筋入腹及客忤死。

○衍義曰、熱湯能通經路、患風冷氣痺、人以湯淋脚、湯

膝厚覆取汗、周身然、別有藥、亦假陽氣而行爾、四時暴

泄痢、四肢冷、臍腹疼、深湯中坐、浸至腹上、頓頭作生

湯、藥無速於此、虛寒人始坐湯中必戰、令常令人伺守○

拾遺曰、傷寒初起、取熱湯飲之、候吐則止、又方、忤惡

卒死、銅器或瓦器盛熱湯、隔衣熨其腹上、冷即易、立愈、

又方、凍瘡不瘥、熱湯洗之。○暑月喝死、以熱湯徐徐灌之、

小舉其頭令湯入腹、即甦、又方、蛇繞不解、熱湯淋之、

即脫(千金方)○火眼赤爛、緊閉目、以熱湯沃之、湯冷即止、

頻沃取安、妙在閉目、或加薄荷防風荆芥、煎湯沃之、亦

妙、○延壽書曰、金瘡血出不止、以故布蘸熱湯、會之、○

集簡方曰、癰腫初起、以熱湯頻沃之、即散也。

生熟湯。調中消食、凡痰瀘及宿食毒惡之物、臚脹欲作霍

亂者、即以鹽投中、進一二升、令吐盡痰食、便愈

雨。○正傳曰、立春節雨水、其性始是春升生發之氣、故

可以養中氣不足清氣不升之藥、古方、婦人無子、是日夫

婦各飲一盃還房有孕、亦取其資始發育萬物之義也。

臘雪。臘雪水大寒之水也、時珍曰、接劉熙釋名云、雪洗

也、洗除瘡癘蟲蝗也、凡花五出、雪花六出、陰之成數也、

冬至後第三成爲臘、臘前三雪大宜菜麥、又殺蟲蝗、臘雪

密封陰處、數十年亦不壞、用水浸五穀種、則耐早不生蟲、

洒凡度間、則蠅自去、醃藏一切果食、不蛀蠹、豈非除蟲

蝗之驗乎。

夏水。解煩喝、消暑毒○時珍曰、傷寒陽毒、熱盛昏迷者、

以冰一塊置於臚中良、亦解燒酒毒○藏器曰、夏暑盛熱食

水、應與氣候相反、便非宜人、恐入腹冷熱相激、却致諸

疾也、食譜曰、凡夏用水止可隱映飲食令氣涼爾、不可食

之、雖當時暫快、久皆成疾也。

更に古人は諸水に毒ありとなし説を爲すこと次の如し

陰地流泉有毒、二八月行人飲之、成瘡瀘損脚力○澤中停

水五六月有魚鱉精、人飲之成癩病○沙河中水、飲之令人

瘡○兩山夾水、其人多癩、○冷水沐頭、熱泔沐頭、並成

頭風、女人尤忌之○時雨後浴冷水、損心胞○盛暑浴冷水、

成傷寒○產後洗浴、成瘧風、多死○酒中飲冷水、成手顫

○酒後飲茶水、成酒癖○飲水便睡、成水癖○小兒就瓢及

瓶飲水、令語訥○夏月遠行、勿以冷水濯足○冬月遠行、

勿以熱湯濯足。

上來舉げたる所を見るよ、其説く所荒唐無稽、寔に取る

に足らざるもの多しと雖とも、而かも亦、其中眞理を存

し、興味を掬すべきもの無きに非ず、彼の凍僵人勿以

熱湯濯足能脱指甲と云ふが如き、或は凍瘡不瘥熱湯洗之  
と云ふが如き、或はまた金瘡血出不止以故布蘸熱湯膏之  
と云ふが如き豈に亦吾人の意を得たるものに非ず耶。

○逝く水

すみれ

安房のしまやま雲たねて

かすみこめたるかづさ山

ろらは長閑に見ゆれども

晴れぬ思ひをいかにせん

送らるゝひとをくるひと

しばしなごりを鴛鴦の

波またゞよふこゝちして

別れ行なりにしひがし

安房と相摸の間なる

こゝが別れのなみのせき

昨日あひしはゆめにして

けふの別れがうつゝかも

世は小車のまわること

あふはわかれの基にて

おもふにまかせぬ例とは

誰がはしめをかひきいでし

風は梢をはらへども

こゝろの雲は晴れやらす

水は岩をながせども

心のうきはきねもせず

君がやさしきおもかけは

この浮雲をはらひしを

君がなさけの言の葉は

この憂事をやりにしを

あじきなき世も君故に

しばしひらく笑顔あり

思ひなき身も君ゆゑに

たまゝ落るなみだあり

筑波根風をやみなく

紫にほふ空のいろ

さゝらく波に日は落ちて

紅たゝむみづのあや

松原あたり風たちて

車にかへるかりひとつ

あはれ心をしるか君

あはれ血に啼くろの聲を

空の心もかすむとき

またうちさわぐ我胸の

開なるいたみたへがたく

聴かじとすれどすべもなし

君紅のかくはせは

君か眼になみたあり

君白妙の肌の裡

君かむねには血汐あり

思ひにやせしこの肩に

にほひてきよき玉ぼこの

手をちきろへて君やさく

この露重きことのはを

光りに榮ゆく黒髪のを

下にかくろふろの顔を

笑ましげに見て我さかむ

その望あるものがたり

君行まざば我はまた

もとの憂にあふみ瀉

深き恨みのありろ海

入重の汐路に水まして

身は浮舟のかじをたぬ

よるべも彼の荒磯に

岩うつ浪の音につれて

千々にこがるゝ心かな

あかぬ別れに日は暮れて

夕先渡るしまちどり

岩根にむせぶ荒波に

友を呼びこふ聲かれて

足柄山の明日をだに

しらぬ海路のかし枕

黒き煙をあとにして

君はゆくなり唯一人

虧けゆく月に手を舉げて

誰れか行手をとゞむべき

流るゝ水に足をのべ

誰れか流れをとゞむべき

行けよ我友われは又

うたてきことはいざいはじ

行けよ我友われは又

仇なることよはやなかし

岩下清水末遂に

同し流れにゆくものを

入にし月も何時しかは

同じ光りに照るものを

こゝめは白し青海に

むせひてくたぐ玉百千

仰げはたかし大空に

無言のひかり星ひとつ。

○夕雲 すみれ

やみにゆく彩いろくの夕くもをさとしのいと観しを  
の子われ

きみとわれしのぶかもとのたけの椽夕かぜたちて青葉み  
だるゝ

み水たまへさほど冷にしきみならばさますゝべなし我に  
へし胸

ろらに射し征矢はかしはたわかうたは尙忘られて君かみ  
むねに

わひしさの月のなかれに君とともにつゆけの風に袖ぬら  
さばや

歌にやせ詩にやせはてはもだぬくなきてきねんは惜し  
きの人の子

この夕みろらのほしを仰ぎみて京にひとりのともをおも  
ふかな

きみとわれなやみにまよふ夕よりかねのねさねて月あか  
るけさ

夕やみに蛇の目傘二つゆきかひてあめ斜なりかきつさく  
あたり



會 報

○叙任及辭令

- 任陸軍三等軍醫
- 任陸軍三等軍醫
- 任陸軍三等軍醫
- 任陸軍三等軍醫
- 任陸軍三等軍醫

- 清水 秀夫
- 藤 浪 謙
- 増田 貞吉
- 松 村 魁
- 太田 長作

任陸軍三等藥劑官

(以上三月三十日、内閣)

宮川 一雄

補工兵第九大隊附

陸軍三等軍醫

清水 秀夫

補歩兵第十一聯隊附

陸軍三等軍醫

藤 浪 謙

補歩兵第三十五聯隊附

陸軍三等軍醫

増田 貞吉

補歩兵第三十六聯隊附

陸軍三等軍醫

松 村 魁

補工兵第五大隊附

陸軍三等軍醫

太田 長作

補大津衛戍病院附

陸軍三等藥劑官

宮川 一雄

(以上三月三十日、陸軍省)

(三月三十日附内閣及陸軍省叙任辭令ハ前號ニ掲載スベキ筈ノ處編者ノ粗瀆ノ爲メ之ヲ脱セリ依テ遅延ナガラ爰ニ掲載セリ)

金澤醫學專門學校教授勳六等

櫻井 小平太

叙勳五等授瑞寶章

(以上六月二十五日、賞勳局)

石川縣金澤病院醫員

森 島 彦夫

月俸金五拾圓給與

石川縣金澤病院醫員

三 木 三 郎

月俸金參拾五圓給與

石川縣金澤病院醫員

八 田 智 證

各 通

石川縣金澤病院醫員

伊 野 宮 長 民

月俸金貳拾參圓給與

(以上七月二日、石川縣)

○會員動靜

▲大西教授 は既記の如く四月二十一日金澤市立櫻木病院(傳染病院)醫長を囑託せられたるが尙同市參事會の委嘱に由り去六月十三日出發東上せられベスト病取締方法等を調査し同月十九日歸校せられたり

▲久保武氏 京都帝國大學醫科大學解剖學助手にして本會特別會員たる同氏は今般愛知縣醫學校の聘に應じ赴任せられたりと云ふ

▲松原三郎氏 本會特別會員にして久しく東京帝國大學醫科大學助手として精神病學教室に勤務せられ令聞噴々たる同氏は不日金澤へ歸省せらるゝ由尙ほ聞く所に據れば同氏の専門學科研究の爲め遠からず獨逸國へ自費留學の企ありと云ふ

○身體檢查成績

去る四月中宮田教授主任となり本校生徒に施されたる身體檢查成績の級別表は次の如くなりと云ふ

生徒身體檢查級別表

分	百										均 平		科 目 級 別			
	體 格		脊 柱								胸 圍	體 重		身 長		
	兩眼正視	薄中強	後屈	右彎		左彎		正	盈虛ノ差	常時						
六五、九	五、八	四、二					二、三				九七、七	七、七	八、〇	五、四、六、三、〇	一六、二	四 醫 年 一 三
六、七	四、五	六、二	三、三	一、五							九八、五	七、七	八、〇	五、八、五、八	一六、〇、七	年 二 學
八〇、七	四、四	五、八	三、六、八	〇、九						一、八	九七、四	七、九	八、七	五、四、六、五	一六、〇、三	年 一 科
八〇、七	九、七	五、〇	四、三	一、八						一、八	九六、五	七、七	八、三	五、二、一、六	一五、六、六	年 一 科
五〇、〇		一〇、〇									一〇〇、〇	七、〇	七、五	四、九、三、〇	一五、五、五	三 藥 年 一 二
七五、〇		六、五	三、七、五								一〇〇、〇	八、三	八、三	五、三、七、五	一五、六、六	年 一 學
九二、九		七、四	二、八、六	七、一							九二、九	七、三	八、一	五、四、〇、九、三	一六、〇	年 一 科

級名	人	員	疾	病	數	百人	對	ス	ル	患	者	數
醫學科第四年	四	六	一	一	一	二	五	〇	〇	二	五	〇
同 第三年	一	一	一	一	一	一	八	〇	〇	一	八	二
同 第二年	一	一	一	一	一	一	三	〇	〇	三	〇	七
同 第一年	一	一	一	一	一	一	四	〇	〇	四	〇	三
藥學科第三年	二	四	〇	〇	〇	五	〇	〇	〇	五	〇	〇
同 第二年	八	二	四	四	四	三	五	〇	〇	五	〇	〇
同 第一年	四	二	五	四	四	三	五	〇	〇	五	〇	〇

疾病數百分比例

受檢人員	例						比					
	齒牙		視力				右眼		左眼			
	齶齒ナキ者	齶齒アル者	近視	遠視	正視	近視	遠視	正視	近視	遠視	正視	
四	四三	五、八	三、四	一	一	三、四	一	一	三、〇	一	一	三、〇
六	五〇、〇	五〇、〇	三、八	一	一	一、五	三、〇	三、〇	一、五	〇、九	一	三、〇
二	四、五	五、四	一、九	一	一	一、九	〇、九	一、九	〇、九	〇、九	一	〇、九
一	二、四	四、三	一、八	一	一	〇、九	一、八	一、八	〇、九	一、八	一	一、八
二	一〇〇、〇	五〇、〇	五〇、〇	一	一	五〇、〇	一	一	五〇、〇	一	一	一
八	二五、〇	七五、〇	二五、〇	一	一	二五、〇	一	一	二五、〇	一	一	一
一	四	五、七	四、九	七	一	七	一	七	一	七	一	一

### ○學年試驗

本學年試驗は規定の如く六月二十日より始まり同月三十日を以て悉く結了せり

### ○書籍寄附

昨年本校醫學科を卒業されたる加納景成君外四十名より紀念として愛氏新内科書及集成藥物學各壹部を、特別會員たる兒島亮吉氏は醫學士加納和夫及遠山郁三の両氏と共に編著されたる顯微鏡使用法一部を、又吐鳳堂書店より同店發行の顯微鏡的研究法中篇下篇二冊をいづれも本會へ寄附せられたり本會は茲に深く諸氏の厚意を謝す

### ○日本醫事雜誌索引

本誌前號廣告欄内にも見へたる「日本醫事雜誌索引」の愈々今回日本醫事年報社より發行せられ東京本郷區龍岡町吐鳳堂書店より發賣せらるゝこととなれり吾人は在東京醫事雜誌社の諸氏が共同して日本醫事年報發刊のことを計畫せられたる事あると豫て聞く所なりしが年報編纂の

ことは未だ其運に至らざるが如きも曩に日本醫事週報社の川上元治郎氏と醫事新聞社の藤根常吉氏は帝國圖書館司書たる太田爲三郎氏と謀り氏に醫事雜誌總索引編纂の事を託したるに氏は之を快諾し半歳にして稿成り富士川游氏の校閲を経て今回之を發行するに至りたるものゝ由なるが今回發行の索引は明治三十五年中發刊せる本邦醫事雜誌四十有六種より原著及び主なる講義、講演、雜録を字書體に排列して搜索に便ならしめたるものにして此書の出版は我刀圭社會に多大の利益を與ふものたることは固より言ふを須むざるところ吾人は只爰に特筆以て深く諸氏の効勞を多とすると同時に此書の逐次發行せられんことを切望するもの也 (南溪)



通信

○松原三郎氏の通信

(七月四日發、東京醫科大學病  
神病學教室ニテ、下平教授宛)

(前略)先日雜誌原稿の件につき御申越有之候へども當時  
何となく多忙にて神經學雜誌の編輯は從事し加之稍や  
研究中のことも有之候へ共未だ完備せざる次第につき御  
高命に應ずべき種もなく誠に汗顔の至りに御座候間不惡  
御諒察下され度奉願候

何れ小生も此月十二三日頃に歸省可仕候よつき其節拜眉  
の上申譯可仕候

小生も數年間精神病學教室内に碌々仕りて徒らに光陰を  
費して何の得る所もなく今更汗背の至り又存候此上尙ほ  
永く碌々罷在候ても不肖なること得る所も尠なかるべし  
と存ぜられ候につき一度海外又留學仕度希望に御座候勿  
論目下の處にては希望といふに過ぎざる不確實の望に御  
座候何れ今夏歸省の上家族の者と相談仕り候上にて決定

可仕考に御座候、目下の考にては出發の期日ハ多分十月  
頃と相成るべく候故今夏は七月十二三日頃より七月三十  
日頃迄歸省仕り出發の前に更に九月下旬頃歸省仕り度考  
に御座候

東京の同窓生中よと別に異りたる事も無之候

小生は來八月發刊雜誌の原稿を整理し活版屋に托して其  
上に歸省することなれば時日未定なれども多分此月十二  
三日頃又歸省の豫定に御座候 草々敬具

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

公文

○内務省令第三號

明治二十四年五月當省令第五號改正日本藥局方別冊ノ通追加シ明治三十  
六年七月一日ヨリ施行ス

明治三十六年六月二十四日

内務大臣 男爵内海忠勝

○内務省令第三號別冊

「デフテリア」血清

*Serum antidiphthericum.*

「デフテリア」血清ハ「デフテリア」毒素ヲ以テ免疫シタル馬ノ血清ニシテ硝子壺ニ容レ封緘ヲ施シ製造所名、一立方「センチメートル」中ノ免疫單位數一壺中ノ免疫單位數、試験番號、試験年月日ヲ表記シ光線ニ觸レサル様包裝シタルモノナリ

本品ヲ「ブイヨン」或寒天培養基ニ好氣性及嫌氣性培養法ヲ行フニ無菌ナラサル可カラス

(甲) 液體「デフテリア」血清

*Serum antidiphthericum liquidum.*

本品ハ類黄色澄明或ハ微ニ潤濁セル液ニシテ貯藏ノ目的ニ添加シタル防腐劑ノ臭氣ヲ有ス

本品一立方「センチメートル」中ニハ五百免疫單位以上ヲ有セサル可カラス但免疫單位ノ計算ハ「ペーリンク」「エーリリヒ」ノ方法ニ據ル

本品ハ一壺中ノ免疫單位數ニ從ヒ通常左ノ三種ニ區別ス

第一號 六百免疫單位

第二號 千免疫單位

第三號 千五百免疫單位

本品〇、五立方「センチメートル」ヲ體重約十五「グラム」ノ南京鼠ノ皮下ニ及其十立方「センチメートル」ヲ「モルモット」ノ皮下ニ注射スルニ之ヲ致死セシム可カラス

本品ノ著シク潤濁シ又ハ多量ノ涎滓ヲ含ムモノハ供用ス可カラス冷暗所ニ注意シテ貯フヘシ但一年以上ニ過ク可カラス

(乙) 乾燥「デフテリア」血清

*Serum antidiphthericum siccum.*

本品ハ乾燥シタル「デフテリア」血清ニシテ黄色透映ノ小葉片或ハ帶黄白色ノ粉末ナリ

本品「グラム」ハ少ナクモ五千免疫單位ヲ有シ防腐劑及其他ノ添加物ヲ含有ス可カラス

本品ヲ十分ノ水ニ溶解シタルモノハ液體「デフテリア」血清ト同一ノ外觀ヲ呈スヘシ

本品ヲ十分ノ滅菌水ニ溶解シタルモノ、試験ハ液體「デフテリア」血清ノ條ニ掲グル所ニ準據スヘシ

冷暗所ニ注意シテ貯フヘシ

本品ハ用ニ臨テ石炭酸水(1:100)又ハ滅菌水ヲ以テ稀釋スヘシ

破傷風血清

*Serum antitetanicum*

破傷風血清ハ破傷風毒素ヲ以テ免疫シタル馬ノ血清ニシテ硝子壺ニ容レ封緘ヲ施シ製造所名、一立方「センチメートル」中ノ免疫單位數、一壺中ノ免疫單位數、試験番號、試験年月日ヲ表記シ光線ニ觸レサル様包裝シタルモノナリ

本品ヲ「ブイヨン」或寒天培養基ニ好氣性及嫌氣性培養法ヲ行フニ無菌ナラサルヘカラス

(甲) 液體破傷風血清

*Serum antitetanicum liquidum.*

本品ハ類黄色澄明或ハ微ニ潤濁セル液ニシテ貯藏ノ目的ニ添加シタル防腐劑ノ臭氣ヲ有ス

本品一立方「センチメートル」中ニハ五百免疫單位以上ヲ有セサル可カラス但免疫單位ノ計算ハ「ペーリンク」ノ方法ニ據ル

本品〇、五立方「センチメートル」ヲ體重十五「グラム」ノ南京鼠ノ皮下ニ及

其十五互センチメートル「チ」モルモット」ノ皮下ニ注射スルニ之ヲ致死セシム可カラス

本品ノ著シク濁濁シ又ハ多量ノ涎滓ヲ含ムモノハ供用ス可カラス  
冷暗所ニ注意シテ貯フヘシ但一年以上ニ過ク可カラス

(乾) 乾燥傷風血清

Serum antituberculinum siccum.

本品ハ乾燥シタル破傷風血清ニシテ透映ノ小葉片或ハ帶黃白色ノ粉末ナリ  
本品「グラム」ハ少ナクモ五十免疫單位ヲ有シ防腐劑及其他ノ添加物ヲ含有ス可カラス

本品ヲ十分ノ水ニ溶解シタルモノハ液體破傷風血清ト同一ノ外觀ヲ呈スヘシ  
本品ヲ十分ノ滅菌水ニ溶解シタルモノノ試験ハ液體破傷風血清ノ條ニ掲クル所ニ準據スヘシ

冷暗所ニ注意シテ貯フヘシ

「ツベルクリン」

Tuberculinum.

「ツベルクリン」ハ結核菌ノ屈里設林「アイオン」培養ヲ蒸發シ十分一容量ニ濃縮シ濾過シタル液ニシテ硝子壺ニ容レ封緘ヲ施シ製造所名、試験番號、試験年月日ヲ表記シ光線ニ觸レサル様包装シタルモノナリ

本品ハ透明褐色ニシテ特異ノ香氣ヲ有シ水ニ容易ニ混和シ有效成分ノ外百分中約四十分ノ屈里設林「アイオン」ノ成分ヲ含有ス

本品〇・二五乃至〇・二五「グラム」ヲ豫メ七乃至九週日間ニ致死セシムル量ノ結核菌培養ヲ皮下ニ接種シテ三週日ヲ經タル體重約三百「グラム」モルモット」ノ皮下ニ注射スルニ二十四時間内ニ致死セシメサル可カラス又其「モルモット」ハ剖檢上「ツベルクリン」ニ特異ノ變狀ヲ呈シ其他ノ疾患ヲ

認ム可カラス

本品ニ「グラム」ヲ健康ナル「モルモノト」ノ皮下ニ注射スルニ之ヲ致死セシム可カラス

本品ヲ「アイオン」莖寒天培養基ニ好氣性及嫌氣性培養法ヲ行フニ無菌ナラサル可カラス

冷暗所ニ注意シテ貯フヘシ但一年以上ニ過ク可カラス  
本品ハ用ニ臨テ石炭酸水(1:200)又ハ滅菌水ヲ以テ稀釋スヘシ

(第二表)

「アフトリア」血清 破傷風血清 「ツベルクリン」

日本藥局方藥品索引

(ハ)

破傷風血清

一頁

「アフトリア」血清  
「ツベルクリン」

二

INDEX NOMINUM.

	S.	Pag.
Serum antidi phthericum.....	1.	1.
„ antitaneium.....	1.	1.
	T.	
Tuberculinum .....		2.

○内務省令第四號

明治二十二年三月法律第十號藥品營業並藥品取扱規則第三十五條ニ依リ明治

二十五年三月當省令第二號毒藥劇藥品中劇藥ノ部「コッホ氏ツベルクリン」トアルナ「ツベルクリン」ト改メ「コッホ氏新ツベルクリン」ト次ヘ左ノ通達加シ明治三十六年七月一日ヨリ施行ス

明治三十六年六月二十四日 內務大臣 男爵内海忠勝  
デフリニア血清 破傷風血清 デウレンチン 鹽酸ヘロイン

○內務省令第五號

痘苗及血清其他細菌學的豫防治療品製造取締規則左ノ通定ム

明治三十六年六月二十四日 內務大臣 男爵内海忠勝

痘苗及血清其他細菌學的豫防治療品製造取締規則

第一條 痘苗及血清其他細菌學的豫防治療品ヲ販賣ノ目的ヲ以テ製造セムトスルモノハ左ノ事項ヲ具シテ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

一 製造所ノ名稱及位置

二 製造品ノ種類、製造ノ方法、有效期限、販賣價格

三 製造所ノ建物畜舎ノ構造敷地ノ坪數及圖面

四 所長及主任技術者ノ氏名履歷

前項ノ認可ヲ受ケタル後前各號ノ事項ニ變更ヲ要スルトキハ更ニ認可ヲ受クヘシ

第二條 地方長官ハ必要ト認ムルトキハ本則ノ認可ヲ取消スコトアルヘシ

第三條 本則施行ノ際痘苗及血清其他細菌學的豫防治療品ヲ販賣ノ目的ヲ以テ製造スルモノハ本則施行ノ日ヨリ四箇月以内ニ本則ニ據リ認可ヲ受クヘシ

第四條 本則ニ違背シタル者ハ二十五圓以下ノ罰金又ハ二十五日以下ノ重禁錮ニ處ス

第五條 本則ハ明治三十六年七月一日ヨリ施行ス

第六條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監ニ之ヲ行フ

\* \* \* \* \*

(會告)

會 告

○寄贈及交換書目

(七月七日迄領收ノ分)

新撰顯微鏡使用法 壹部一冊	兒島亮吉君
實用顯微鏡使用法 壹部一冊	兒島亮吉君
學士會月報 一八三、四	同 會
藝備醫事 八四ノ七ノ二、八五ノ八ノ一、	同 發行所
學校衛生 一、	同 研究所
日本醫事週報 四三、四四、五六、	同 社
醫海時報 四九、七〇、二、	同 社
藥石新報 四六、五、六、七、	同 社
產婆學雜誌 四二、三、	日本產婆學協會
北海醫報 三ノ三、	北辰病院研究會
軍醫學會雜誌 一三、六、	陸軍々醫學會
研瑤會雜誌 五、	同 會
日本助産婦新報 六、五、	同 發行所
中外醫事新報 五七、八、	同 社
東京醫學會雜誌 一七ノ二、三、	同 會
神經學雜誌 二ノ二、	日本神經學會
成醫會月報 二五、	同 會

第十全會雜誌第二十八號

- 校友會雜誌 三、
- 東京醫事新誌 一三〇、一三三、
- 醫談 八三、
- 北辰會雜誌 三五、
- 醫科器械月報 一三、
- 產科婦人科學雜誌 五ノ六、
- 醫事新聞 三九、四〇、
- 助産ノ栞 八五、
- 大日本耳鼻咽喉科會々報
- 國家醫學會雜誌 一九四、
- 病理組織及細菌類顯微鏡的研究法 中、後篇二冊
- 植物學雜誌 一七ノ一、五、
- 藥學雜誌 二五六、
- 順天堂醫事研究會雜誌 三六六、
- 廣島衛生醫事月報 五四、
- 校友會雜誌 一九、
- 東北醫學會々報 二九、
- 大日本私立衛生會雜誌 二四二、
- 岡山醫學會雜誌 一六一、
- 日本眼科學會雜誌 七ノ六、
- 好生館醫事研究會雜誌 一〇ノ三
- 校友會雜誌 二五、

- 東京開成中學校 會
- 同 局
- 同 發行所
- 同 第四高等學校
- 同 社會
- 同 社會
- 同 緒方助産婦學會
- 同 會
- 同 會
- 吐鳳堂書店
- 東京植物學會
- 日本藥學會
- 同 會
- 同 三重縣第一中學校
- 同 會
- 同 會
- 同 會
- 同 會
- 同 會
- 同 千葉醫學專門學校

肉又蚊第二回報告 壹册  
 獨逸語學雜誌 五ノ一〇、  
 衛生談話 三〇、

小林茂樹君  
 全社  
 通俗衛生茶話會

○會費領収

(三治明三十六年七月六日迄)

金貳圓 貳ヶ年分 (自三十四年度至三十五年度) 星野正齊君

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

本會雜誌發行遲延致居候  
 處次號(第二十九號)は來八  
 月中發行の筈に付き會員  
 諸君は續々御投稿あらむ  
 ことを希望す

明治三十六年七月十日

十全會雜誌部

